



## 「読む力」についての一考察 (1)

— 向田邦子の作品「お辞儀」<sup>1)</sup>の解釈を中心に —

呉エクステンションU&C

深川賢郎

### ■ はじめに

わたしたちの生活が潤いのある快適さを保っているとするれば、それは「読む力」に負うところ大である。教師は学生の願いを読み取り、学生は教師の思いを受けとめる。職場の同僚と意思の疎通を図る。これらが円滑に展開するためには、人の発言の真意を「読む力」が前提となる。学生の「患者様のこころの分かる看護師になりたい」という願いも、患者をとりまく周囲の状況を「読む力」、患者の気持ちや病状、医師や家族など関係者の心を「読む力」がなければ実現することはできない。

作品を読むことは著者との対話である、とよく言われるが、読者が問いかけても、作者は作品の文字表現以上のことを応えてくれることはない。そこで、賢明な読者は「行間を読む」のである。作者の表現に限りなく忠実に従いながら、最後のところで、私たちは「作品読み」から「読者読み」（読者の創造性を加味した読み）に移る。大胆に飛翔する読みの創造性が読者を育て、作品を解釈することの醍醐味を与えてくれるのである。

### ■ 「読む力」の大切さ

昭和の初期、東京下町の小学生、豊田正子の作文が『綴り方教室』<sup>2)</sup>にまとめられ、一世を風靡した。この本は現在も読まれ、日本の作文教育の白眉とされている。川端康成も当時の新聞に、この作品には完成度の高い写実が見られる、と激賞している。小学生であった豊田正子の文章は、自分の体験した事実を映画のフィルムでも見るように、克明に再現している。これは、彼女の先生大木顕一郎のていねいな個別指導（「膝下指導」）の成果である。

体験した事実を克明に描写する力は、多様な要素によって構成されている。まず、現象をとらえる鋭敏なアンテナが必要である。次に、捉えた情報を選択し、読み取る力が必要である。現象を深く読み取るためには、現実に対する強い問題意識や関心がなければならない。鋭い感性も必要である。言い換えると生活者としての「生き」のよさ（情熱・熱意）や「やる気」（意欲）などがベースとなる。

豊田正子の問題意識を引き出し、生活を見つめる鋭い感性に磨きをかけた大木顕一郎の力は偉大である。大木顕一郎は豊田正子のなかに、作文の技術ではなく、現実を「読む力」の灯を点したのであった。豊田正子は、作文によって生活者としての自覚に目覚め、自ら輝いて生きる日々を手にすることができたのである。

文章表現力は二つの力で構成されている。幅広い裾野を持つ「生活を読む力」と自分の中に形成された思想を「的確に表現する力」とである。この二つの力が表現のプロセスにおいて、書き手の生き方やものの考え方を反映し、その人らしい文章が生まれる。

作家といわれる人々は、こうした力量を磨き、自分なりの文体（文風、文の風合い）を獲得したプロ

ふかがわ けんろう

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉エクステンションU&C

である。私たちは作家の目でとらえた成果を「読書」という形で享受している。「読書」は、いわば作家の目を通して示された課題や問題提起を、作家に手を引かれてたどる営みである。

私たちが文学作品に親しむことは、趣味や遊びの場合もあるが、いま論じてみたいのは、そんなレベルではない。文学や評論によって、人間の生き方を見据え、思索したり、感動したりすることは、私たちの生き方にかかわる問題である。読書行為は、自分の生活を耕し、よりよい社会を形成する成員となるための必須条件といえる。若者の読書離れは出版物を変質させ、出版活動をも変化させた。が、ことはそんなに単純ではない。活字に親しみ、読書を愛する人々の減少が、社会のモラルを変え、人間性の崩壊や凄惨な空気を生み出しているという声が喧しいほど聞こえてくる。

B. サンダースは『本が死ぬところ暴力が生まれる』—電子メディア時代における人間性の崩壊—<sup>3)</sup>において、次のように述べている。「テレビ、映画にはじまって、レコードやCD、パソコンやテレビゲームまで、考えるあらゆる種類の電子機器が(識字への道を)妨害している。」「このようなメディアが(子どもたちの)養育環境としての仕事の大部分を受け持っている。」という。「本が死んだら暴力が生まれる」という仮説は、多くの新聞記事が証明しつつあるところである。

現実や、それを写し取った文章(活字)を「読む力」が痩せ細っている社会で、豊かな感性や暖かい人間関係を育むことはできないだろう。

## ■ 向田邦子の「読む力」

向田邦子の作品を読むと、描かれている場面が手に取るようにイメージを伝えてくれる。それは彼女がシナリオ作家として成長してきた成果であろう。彼女の作品がリアリティーをもっているのは、現実を透徹した目で「読む力」を備えていたからである。そして、多くの人が見逃していたかもしれないさまざまな現実を描き出して見せてくれる。それは、人の動きであったり、生き方であったり。向田邦子のエッセイ集『父の詫び状』から「お辞儀」の一部を取り上げて考察してみよう。

### 1. 母のお辞儀<sup>4)</sup>

お産以外に寝込んだことのない母は、発作性頻脈をひきおこし、検査入院することになった。70歳である。仕事が一段落して、邦子たち子どもが四人そろって見舞いに行ったのは、入院後一週間たってからであった。

「見舞いの来ない患者もいるのに、こうやってぞろぞろ来られたんじゃお母さんきまりが悪いから当分は来ないでおくれ。」

と演説しながら、一番小さな母が先頭に立って廊下を歩いてゆく。

「本当にもう来ないでおくれよ。」

くどいほど念を押してエレベーターに私たちを押し込むと、ドアのしまりぎわに、

「有難うございました」

今までのぞんざいな口調とは別人のように改まって、デパートの一階にいるエレベーターガールさながらの深々としたお辞儀をするのである。

見舞いに来るたびに、このように「お辞儀」をする母親のことを、帰って行く四人のきょうだいは「たまんねえな」などといいながら、それぞれの思いを噛みしめるのである。

邦子は母親の言動に何を読み取っているのでしょうか。

「こうやってぞろぞろ来られたんじゃお母さんきまりが悪いから当分は来ないでおくれ」とか「演説しながら、一番小さな母が先頭に立って廊下を歩いてゆく」「くどいほど念を押してエレベーターに私たちを押し込む」という。これは、見舞いを受ける側の態度にふさわしくない言動である。

この部分には、子どもたちに心配をかけまいとする母親の虚勢がある。わざと元気に振舞うことに子どもへの配慮がうかがえる。あるいは、あまり重くもない病気に大げさに反応する子どもを「たしなめる」

要素もあるかもしれない。

しかし、エレベーターのドアが閉まるとき、母親は、「ありがとうございました」と、「今までのぞんざいな口調とは別人のように改まって、デパートの一階にいるエレベーターガールさながらの深々としたお辞儀をする」のである。向田邦子の冴えた目は、この事実を見逃さなかった。

それまでの母親の態度とは豹変した趣である。子どもの立場からしてみると、親は親として毅然とした姿であってほしいのである。しかし、老いた母親の別の一面を見てしまう。口では強がりを行いながら内心では子どもたちの暖かいまなざしに感謝している。「ありがとうございました」という母親の「お辞儀」は、保護する立場の人が保護される立場に入れ替わっていることを示している。子どもの成長によって、立場の逆転が少しずつ明確になってくる。向田邦子はこの文章の末尾をつぎのようにくくっている。

面映ゆいというか、当惑するというか、おかしく、かなしく、そして少しばかり腹立たしい。自分が育て上げたものに頭を下げるということは、つまり老いるということは避けがたいことだと思っ  
ていても、子供としてはなんとも切ないものがあるのだ。

これが邦子たちの当惑である。弟の言った「たまんねえな」ということばは、年取って弱っていく母親に対する四人のきょうだいの実感なのである。うっかりすると見失いそうなしぐさを繋ぎとめ、「老いること」のもつ悲哀を見逃さない。それを「なんとも切ないものがある」と結んでいる。人間として生きることによって課せられた不可避なものをとらえている。「老いる」ということは、私たちすべてのものが負っている宿命である。この、子どもにしか分からない、きわめて微妙で、深い味わいを邦子は「切ない」と表している。向田邦子の文学の味わいは、このような冴えた眼によって顕在化されていく。

## 2. 父のお辞儀<sup>5)</sup>

祖母が亡くなった通夜の夜、女学校二年生の邦子は、初めて「父のお辞儀」を目撃した。それはつぎのように述べられている。

「社長がお見えになった」

という声がした。

祖母の棺のそばに座っていた父が、客を蹴散らすように玄関へ飛んでいった。式台に手をつき、入ってきた初老の人にお辞儀をした。

それはお辞儀というより平伏といった方がよかった。(略)物心ついた時から父は威張っていた。家族を怒鳴り自分の母親にも声高を立てるひとであった。地方支店長という肩書きもあり、床柱を背にして上座に座る父しか見たことがなかった。それが卑屈とも思えるお辞儀をしているのである。

この姿を目撃して、邦子は考えた。「高等小学校卒業の学力で給仕から入って誰の引きたてもなしに会社始まって以来といわれる昇進をした理由を見たように思った。」「私たちに見せないところで、父はこの姿で戦ってきたのだ。父だけ夜のおかずが一品多いことも、保険契約の成績が思うにまかせない締切の時期に、八つ当たりの感じで飛んできた拳骨をも許そうと思った。私は今でもこの夜の父の姿を思うと、胸の中でうずくものがある。」

向田邦子の父、敏雄は未婚の母の下で育った。大正時代の家族制度がまだ幅を利かせていた時代、未婚の母は白眼視され、親戚からは村八分のような処遇を受けた。敏雄は悲惨な幼少時代を生き、母親の内職で細々と生活した少年は、家庭の地位や生活の向上のために必死の努力をした。立身出世をして社会を見返すことが、敏雄の生き方の主要なテーマであった。結婚してからは、中流家庭の格式を重視し、家長としての地位を確立した。それでいて子煩悩な一面を持っていた。一方では威張り散らして権力を振り回し、一方では弱いもの、寂しいものへの優しいまなざしをもっていた。

## ■ 評論家の読み方

文芸評論家平原日出夫は、その著書『向田邦子のこころと仕事』(小学館)<sup>6)</sup>で、父の「お辞儀」を受け入れようとする邦子の心情について、つぎのように述べている。

もし、これがほんとうならば、これは一体、なんという理解、なんという寛恕なのだろうか(略)幼女期の精神的な発芽期に不幸な父として父親を認知していた娘は、普段威厳にみちた父が平伏したからといって父をあなどることはなかった。生きるための父の切実な姿であることを娘は直感したのである。家庭の小さな平和を守るために、父は強い者の前にひれ伏した。それは父のなかのもう一人の不幸な父の姿である。弱い人間だが、必死に生きている姿である。それが弱い者の生の実景なのである。

平原日出夫は、このように解釈している。この解釈は、「私たちに見せないところで、父はこの姿で戦ってきたのだ。」に力点を置いている。父の屈辱や努力に視点を当てると、父親の生き方に対して寛大になるのは当然のことである。

## ■ 邦子のまなざし

邦子のまなざしで、見逃してならないのは、「私は今でもこの夜の父の姿を思うと、胸の中でうずくものがある。」という部分ではないだろうか。向田邦子の「うずくもの」というのは何だったのか。平原日出夫は、「それが弱い者の生の実景なのである。」と明快に述べている。しかし、邦子は「胸の中でうずくものがある」というのみである。この部分が文学作品読解の難しさであり、面白さであると思う。

平原日出夫のとらえた「私たちに見せないところで、父はこの姿で戦ってきたのだ。」という一文は、確かに父親を理解する上で重要な部分である。向田邦子は、父が自分たちの知らないところで、誇りや見栄をかなぐり捨て、必死で上司に仕えていたことを知った。「戦ってきた」という表現は、父への単なる同情ではない。父の力強さへの賞賛や自分たちをこのようにして守ってくれたことへの感謝もあるだろう。しかし、文章の末尾が、「胸の中でうずくものがある」となっている意味は、もう少し深いと思う。

「うずく」というのは、「痛い」とは違う。「苦悩」でもない。渦をまいてこころの奥深く差し込んでくる重い違和感なのである。強いはずの父が、「平伏しなければならぬ」現実が、社会には厳然としてある。このことは平原日出夫のとらえたとおりである。

邦子は、生活のために「戦ってきた」父への思いだけではなく、もっと別の、「やりきれなさ」を伝えたくてに違いない。それは、未婚の母の元に生まれ、虐げられ、平伏することで生きてきた父敏雄の性(さが)となって根強く身体の奥深いところに沈殿している生活の「垢」のようなものであろう。「客を蹴散らすように玄関へ飛んでいった」ことも、「卑屈とも思えるお辞儀をしている」ことも、父親の歩いてきた人生そのものである。生活やわが身を守るための性(さが)となって、「平伏する」ことが血となり肉となっている。娘にとって、父親に巣くっている、こういう、「垢」のようなものに出くわすことは「哀しい」ことに違いない。

しかし、こうした哀しみは、邦子だけのものではない。自分の人生を深く見つめるとき、私たちも、これに通じる垢を持っている。自分が生きのびるために、あるいは自分が守らねばならない家族のために、私たちは恥ずかしい行為をすることがある。そのことに、そこはかたない「哀しみ」や「寂寥」を感じることは多いのではないだろうか。不条理の世界に生きることは、自分の弱さを思い知らされることである。あるいは「哀しみ」を伴うものなのだろう。それが、私たちと作者を結びつける人間の普遍性なのである。

向田邦子の冴えた目が父親の衝撃的な姿をとらえ、私たちに、自分の隠された姿を振り返らせる。邦子は、父親の「お辞儀」に、まずは驚き、それは賞賛と同情にかわり、やがて人間共通の悲哀となって、「うずくもの」を形成している、と私は考える。

## ■ おわりに

向田邦子の作品が魅力的なのは、作家としての「まなざし」が、人生の奥深さをとらえ、誰の心にも通じる普遍的な意味を読み取っているからであろう。しかも、その「読む力」は人間肯定の優しさに発している。父親の生活上の「矛盾」を超えて、父親を受け入れ、その生活を肯定している。私たち読者を捕らえて放さない牽引力がここから生まれていると考えられる。

作家が、自分の生活を「読む力」をもって作品を生み、作品を「読む力」が私たちの生き方を啓発してくれている。このように考えると、わたしたちの職業や立場は何であれ、「読む力」は、私たちの生活の基底にすえられなければならない事柄のように思える。

## 文 献

- 1) 向田邦子著『父の詫び状』文芸春秋文庫, 1981年版, p.52
- 2) 豊田正子著『新編綴り方教室』岩波文庫, 1995年版
- 3) B. サンダース著・杉本卓訳『本が死ぬところ暴力が生まれる』—電子メディア時代における人間性の崩壊— PP 新曜社, 1999年版, p.180
- 4) 向田邦子著『父の詫び状』文芸春秋文庫, 1981年版, p.57
- 5) 向田邦子著『父の詫び状』文芸春秋文庫, 1981年版, p.61
- 6) 平原日出夫著書『向田邦子のこころと仕事』小学館, 1993年版, pp.27-28